

BUDŌ

NEWS

今月のニュース

全日本剣道連盟設立 70 周年記念 第 61 回全日本女子剣道選手権大会



日本武道学会第 55 回大会



全日本剣道連盟設立 70 周年記念

第 61 回全日本女子剣道選手権大会

末永真理が 3 度目の優勝



女子剣道日本一を決める第61回全

日本女子剣道選手権大会（主催Ⅱ全

日本剣道連盟）が9月4日、奈良県

橿原市のジェイテクトアリーナ奈良

で開催された。昨年、一昨年は無観

客での開催だったが、新型コロナウイルス感

染防止対策を徹底した上で3年ぶり

に観客を入れての開催（観覧人数は

制限）となった。

大会には各都道府県剣道連盟から

選出された代表選手64名（満18歳以

上・段位制限なし）が出場し、トー

ナメント方式で実施された。

決勝は和歌山県代表の末永真理

（一般社団法人み・ゆーじ）と前回

優勝の妹尾舞香（福岡・鹿屋体育大

4年）が対戦。延長戦で末永がコテ

を決め、第51・52回大会以来、9大

会ぶり3度目の優勝を果たした。

◇

試合は全日本剣道連盟剣道試合・

審判規則と同細則および大会実施に

あたったの感染拡大予防ガイドライ

ンにより行われた。

試合時間5分の3本勝負で、時間

内に勝敗が決しない場合は延長戦を

行い、先に一本を取った者を勝者と

した。

1 回戦／準々決勝

■第1ブロック

過去2回の優勝経験があり、3年ぶり11回目の出場となるベテラン末永真理（和歌山・一般社団法人・ゆーじ）が順当に勝ち上がった。初戦、やや硬さが見られたが、田添千尋（千葉・清和4年）から延長戦の末にメンを奪って勝利する。

2回戦の大西ななみ（福井・福井県立敦賀高教員）との対戦では3回の延長戦でも決まらず、5分間の休憩を挟んで4回目の延長戦に突入。試合再開後、積極的に足を使って攻めたと大西の手元が浮き、コテを奪って勝利した。3回戦では大阪府警時代の後輩である玉置万優（大阪・大阪府警）と対戦。上段から繰り出す玉置の攻撃を上手く捌いて有

効打を許さず、逆に上段に構えた瞬間にコテを奪い勝利した。準々決勝では前回3位の実力者、川合芳奈（静岡・筑波大2年）と対戦。この試合も延長戦に突入するが、川合がメンに来る瞬間にコテを決め、末永が準決勝に進出した。

■第2ブロック

前回2位の志藤綾子（埼玉・伊田テクノス）、全日本学生選手権大会2連覇中の水川晴奈（岡山・法政大2年）、前々回優勝の諸岡温子（東京・中央大4年）、56・57回大会連覇の高橋萌子（神奈川・神奈川県警）と強豪揃いとなった第2ブロック。



第1ブロック・3回戦＝上段に構える玉置（右）からコテを決める末永



同・準々決勝＝末永（左）が出コテを決める



第2ブロック・3回戦＝水川（右）が笠にメンを決めて勝利

2回戦で志藤と水川が対戦。水川が延長戦でコテを決めて3回戦に進む。水川は3回戦で全日本学生選手権大会3位の笠日向子（茨城・筑波大2年）と対戦。延長戦で豪快な引きメンを決めて勝利し、水川が準々決勝に進んだ。

もう一方は優勝候補の一角である高橋が初戦で敗れる波乱となった。3回戦では同じ強豪・中村学園高校



同・3回戦＝村田（左）が諸岡からコテを奪い勝利

出身同士である諸岡と村田桃子（福岡・福岡県警）の対戦となった。この試合、「後輩には絶対負けたくなかった」と語る村田が先輩の意地を見せ、延長戦でコテを決めて準々決勝に進出した。

準々決勝は水川と村田の対戦。村田は試合序盤から積極的にコテを攻める。上手くかわしていた水川だったが、残り1分を切ったところでついに村田がコテを決める。取り返したい水川は積極的に前に出るが有効打は奪えず、そのまま試合終了。村田が初の準決勝進出を果たした。

■第3ブロック

世界大会と本大会でそれぞれ2回の優勝経験がありながら、コロナの影響で3年ぶりの出場となった松本弥月（神奈川・神奈川県警）に注目が集まったが、本大会出場10回目となる竹村奈緒美（岐阜・パローホルディングス）に初戦で敗れる波乱となった。勝ち上がったのは東京都代表の阿部美洸（警視庁）。初戦で大野美月（石川・金沢学院大1年）にツキを決めて勝利すると2回戦で片山果沙稀（愛知・愛知県警）、3



同・準々決勝＝村田（左）が水川からコテを決めて勝利し、初の準決勝進出を決める



第3ブロック・1回戦＝高校生で出場した能地（右）

回戦で松本泉帆（兵庫・兵庫県警）、準々決勝で尾崎麻美（京都・京都府警）を下し、初の準決勝進出を決めた。今大会最年少の18歳で出場した

好評発売中！

剣道の歴史・技法を戦国期から現代まで時代を追ってわかりやすく解説。

剣道 その歴史と技法

埼玉大学名誉教授

大保木輝雄 著



四六判・上製・516頁・定価2,640円

◎ ご注文・お問い合わせ ◎

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



第4ブロック・1回戦＝高校生で出場した眞下 (左)

■第4ブロック
前回優勝の妹尾舞香が勝ち上がった。妹尾は1回戦で能地と同じく大会最年少の高校生剣士・眞下ゆず

(群馬・共愛学園高3年)と対戦。眞下が反則を2回犯して一本勝ちを収める。2回戦は田村久美(山口・県桜ヶ丘高教員)に延長戦でメンを奪い、3回戦は上段の佐藤詩央(富山・富山県警)からコテを奪って一本勝ち。準々決勝は小学生の頃から地元・福岡で鎧を削り、昨年も準々決勝で対戦した柿元(茨城・法政大3年)と対戦。両者、相手の隙を見いだせず、



同・準々決勝＝妹尾(右)が柿元からメンを奪う

4回目の延長戦に突入。妹尾は柿元が居着いた隙を見逃さずメンを決め、苦しみながらも2年連続で準決勝に進出した。

■大会最年少選手の声

▽能地琴音(東海大付属札幌高3年)

北海道を代表して出場するので自分の力を全て出し切ろうと思いました。初戦で負けてとても悔しいですが、この経験をこれからの剣道に生かしたいです。次は勝ち進めるよう頑張りたいです。

▽眞下ゆず(共愛学園高3年)

初めて出場する大会なので、チャレンジ精神で臨みました。反則で一本取られたのは私の落ち度ですが、最後まで自分のできることはできたと思います。緊張しましたがとても楽しかったです。次は優勝を目指したいです。



末永（右）が出コテを決める

復活優勝を目指す末永と初の準決勝進出を果たした村田が対戦。

足を使いながら竹刀を細かく動かして隙をうかがう末永に対し、村田は積極的に前に出て技を仕掛ける。試合は本戦では決まらず、延長戦に突入。延長戦終了間際、末永は思い切つてメンに跳ぶが惜しくも決まらない。しかしその直後、村田がメンにきたところでコテを決めた。末永が勝負どころを抑えたベテランらしい攻めで村田を下し、決勝進出を果たした。

▽第3位Ⅱ村田桃子（福岡県警）



満足しているわけではないんですが、今までですが、今まで全国大会の個人戦でここまで上

がれたことがなかったので、この結果は良かったと思います。（3回戦で対戦した諸岡選手は）高校の後輩だし、前回は負けていたのでリベンジできてよかったです。来年はもう一つ上に行けるように稽古していきたいと思っています。

準決勝①

末永 真理
（和歌山）

コ——

村田 桃子
（福岡）

準決勝②

妹尾 舞香
（福岡）

メ——

阿部 美洸
（東京）



互いに機をうかがう阿部（左）と妹尾

初の準決勝進出となった阿部と2連覇を狙う妹尾の対戦。

序盤から積極的にメンを打ち込む阿部に対し、妹尾はこれをしっかりと受けて有効打を許さない。試合は有効打のないまま延長戦へ。延長戦に入っても互いに攻めあぐねるが、2回目の延長戦終了間際、妹尾が思い切つて跳び込みメンを打つと旗が3本上がつて勝負あり。妹尾が2連覇へ向け、着実に駒を進めた。

▽第3位Ⅱ阿部美洸（警視庁）



優勝を目指していたので悔しい気持ちでいっぱいです。ルールが変わって鏝（つぼ）

迫り合いが少なくなったので、前で勝負する剣道を心がけて稽古を積んできたのですが、気を抜いたところを打たれました。まだまだ修行が足りないと思います。来年も優勝を目指したいです。

決 勝

末永 真理
(和歌山)

コ —

妹尾 舞香
(福岡)

9大会ぶり3度目の優勝を目指す末永と2連覇を狙う妹尾の対戦となった。

相手の正中線に剣先を向けてどっしりと構える妹尾に対し、末永は足を使って前後左右に動き、小刻みに竹刀を動かす。両者対照的な剣風。ともに機をうかがうも互いに隙を見せず、ほとんど技を仕掛けることなく勝負は延長戦に持ち込まれた。延長戦も同様の展開が続くが、2分を過ぎたところで妹尾は末永の手元が上がった瞬間にメンを狙う。しかしこれは決まらず、そのまま2回目の延長戦へ突入。終盤、末永は間合いが詰まったところで軽くメンを打つ。妹尾はこれに反応してよけるが、末永は妹尾の手元が上がった瞬間を見逃さず、引きコテを決めた。自分の剣道に徹した末永が新旧王者対決を制し、3度目の栄冠に輝いた。



2回目の延長戦で末永（左）がコテを決める



間を詰める末永（左）



メンを狙う妹尾（右）



▽準優勝Ⅱ妹尾舞香(鹿屋体育大4年)

一戦一戦必死に戦いました。

(決勝は)連覇のことは考えず、チャレンジ

ヤー精神で挑もうと思っていましたが、負けてしまったので悔しいという気持ちが大きいです。最後は中間の間に引きコテを打たれたので、今後は注意していかねばいけないと思います。またこの舞台に戻ってきてしっかり勝てるように力をつけてきたいです。

9 大会ぶりの復活V

●優勝Ⅱ末永真里・錬士六段（一般社団法人み・ゆーじ）



末永真理(すえなが・まり)

1988年生まれ、大阪府出身。PL学園高校を経て、大阪府警。2021年、大阪府警を退職後に結婚し、夫の一般社団法人み・ゆーじに所属。12、13年全国日本女子剣道選手権大会優勝。10、12、13、15、17年全国警察剣道選手権大会優勝。18年個人世界剣道選手権大会女子準優勝。

——コロナの影響で3年ぶりの出場となりましたが、見事に3回目の優勝を遂げました。

「自分だけの力ではなく、応援してくれたたくさんの方々にパワーをいただいて優勝できたと思います。すごく嬉しいです」

——過去2回の優勝と異なる点がありますか。

「過去2回の優勝は大阪府警に所属していたこともあり、勝利へのプレッシャーや自分がトップを走らなければならないという気持ちが強い中での優勝だったんですが、今回は気負うことなく試合が

できました」

——この大会に向けてどのような稽古を積んできたのですか。

「大阪府警の頃に比べると稽古は減ったのですが、廃校になった中学校の体育館で主人と稽古してきました。また、退職後たくさんの方に声をかけていただき、大学への出稽古や稽古会などに参加させていただきました」

——決勝はどんな気持ちで戦いましたか。

「妹尾選手はとても強い選手なので、足を止めずに最後まで諦めずにやれば必ずチャンスが来ると思

っていました」

——最後のコテは狙っていたのですか。

「狙っていたわけではなく、自然と体が動きました」

——連覇した時と今を比べてどちらが強いと思いますか。

「全ての面で今の方がずっと強いと思います」

——今後の目標・抱負を教えてください。

「女子剣道をもっと盛り上げていきたいです。また、これから剣道を頑張りたい、試合でもっと勝ちたいと思う子どもたちの力になれたらと思います」



大会後、サインに応じる末永選手（右下）



会場となったジェイテクトアリーナ奈良



網代忠全全日本剣道連盟会長（右）から
皇后盃を授与される末永選手

第61回全日本女子剣道選手権大会

段位	出場 回数	選出県	氏 名	氏 名	選出県	出場 回数	段位
三段	②	(愛 知)	大嶋友莉亜	山室 愛子	(徳 島)	初	三段
五段	⑤	(東 京)	佐藤みのり	尾崎 麻美	(京 都)	⑤	六段
四段	初	(大 阪)	玉置 万優	松本 弥月	(神奈川)	⑨	五段
三段	初	(大 分)	峯松 加奈	竹村奈緒美	(岐 阜)	⑩	六段
四段	初	(宮 城)	岸野 真知	大西 希望	(千 葉)	初	三段
五段	⑧	(福 井)	大西ななみ	岩本 瑚々	(長 崎)	③	四段
四段	②	(千 葉)	田添 千尋	名越 友美	(広 島)	④	五段
錬六	⑪	(和歌山)	末永 真理	藤崎 薫子	(大 阪)	初	四段
五段	初	(奈 良)	濱川 裕子	小川梨々香	(埼 玉)	⑤	四段
四段	⑦	(青 森)	小松 加奈	森山 加世	(島 根)	④	五段
四段	初	(埼 玉)	宮沢 彩夏	松本 泉帆	(兵 庫)	③	四段
三段	②	(佐 賀)	中村 日南	能地 琴音	(北海道)	初	三段
三段	②	(静 岡)	川合 芳奈	阿部 美洸	(東 京)	⑦	五段
五段	②	(長 野)	古畑 匡希	大野 美月	(石 川)	初	三段
四段	②	(愛 媛)	渡邊 茜	片山果沙稀	(愛 知)	④	五段
四段	⑥	(栃 木)	竹中 美帆	糸山 亜美	(福 岡)	④	五段
五段	⑦	(埼 玉)	志藤 綾子	柿元 冴月	(茨 城)	②	三段
四段	初	(愛 知)	岩田 茉莉	齋藤真紀子	(山 形)	初	五段
三段	②	(岡 山)	水川 晴奈	渡邊 タイ	(熊 本)	⑧	五段
四段	初	(沖 縄)	宮城 瑠佳	井上 彩花	(三 重)	初	五段
三段	初	(茨 城)	笠 日向子	有賀 真紀	(山 梨)	⑥	五段
五段	③	(大 阪)	北井 真結	八木 優澄	(滋 賀)	②	四段
四段	初	(宮 崎)	米良加奈子	和栗 宏恵	(東 京)	初	五段
三段	初	(岩 手)	レイン小倉名峰美	立花 愛莉	(高 知)	初	三段
三段	初	(新 潟)	相場 葵	反 妹尾 舞香	(福 岡)	③	四段
四段	初	(鳥 取)	山田 あい	眞下 ゆず	(群 馬)	初	三段
四段	初	(香 川)	真野 愛弓	田村 久美	(山 口)	④	五段
四段	②	(東 京)	諸岡 温子	若松 千春	(福 島)	②	五段
五段	⑦	(神奈川)	高橋 萌子	末吉 杏梨	(鹿児島)	初	四段
五段	②	(兵 庫)	木村歩由実	永井 杏奈	(千 葉)	初	三段
六段	⑭	(秋 田)	加藤 由佳	相原 清乃	(奈 良)	⑥	四段
四段	④	(福 岡)	村田 桃子	佐藤 詩央	(富 山)	②	四段

優勝・末永真理 (和歌山)

日本武道学会第55回大会



中学校部活動の地域移行を模索する

日本武道学会第55回大会は9月3・4日、神奈川県横浜市の桐蔭横浜大学で3年ぶりの対面形式で開催された。

初日には中学校部活動の地域移行に関する基調講演とシンポジウムが実施された。2日目には本年度総会と剣道、弓道、空手道、なぎなた、障害者武道の各専門分科会が行われた。

また、2日間を通して人文・社会科学系、自然科学系、武道指導法系、ポスター発表の4分野に分かれて、一般研究発表が実施された。

■基調講演

3日午後1時から溝上真一桐蔭学園理事長が挨拶を述べて基調講演に移った。

◎講師 小久保智史氏（スポーツ庁地域スポーツ課課長補佐）

テーマ「子供たちの成長を社会全体で支える、運動部活動の地域移行について」

学校での運動部活動はこれまで、生徒のスポーツの機会を確保するとともに、学校教育上、大きな役割を

果たしてきた。しかし、近年は少子化により、部活動の継続が厳しさを増している。また、中学校で運動部だけに所属している生徒が減少し、地域スポーツクラブに所属している生徒は増加しているなど、生徒のニーズが多様化している。そのため、学校単位での部活動では、スポーツ機会の確保が難しくなる地域が増えることが懸念されている。さらに、教員の視点からも競技経験のない教員が指導せざるを得ない現状もあり、大きな負担が生じている。そこでより良い地域スポーツ環境の構築を目指していくことが重要と考えられる。

そのためには、休日の運動部活動を段階的に地域に移行すること、平日は地域の実情に応じてできることに取り組むこと、また、受け皿となる地域スポーツ団体と学校の連携・協働の推進が必要である。

急速に変化する社会では学校の「当たり前」を見つめ直す必要性がある。生徒にとってより良いスポーツ環境の構築を目指し、関係者との対話や試行錯誤、共同理解を深める努力を続けていきたい。

■本部企画シンポジウム

テーマ「中学校部活動の地域移行について考える」

3日の午後2時20分から行われた。まず、パネラーの軽米満世氏（全日本剣道連盟常任理事・学校教育部会委員長）と高橋健司氏（日本中学校体育連盟柔道競技部長）がそれぞれ発表を行ったあと、三村由紀氏（日本武道学会企画委員・防衛大学校）

の司会で参加者との質疑応答・意見交換が行われた。

▽軽米満世氏

子どもたちに中学校在学中に一番心に残っていることを聞くと部活動と答える子どもが多い。部活動が教育的意義のある活動であることは間違いない。

現在の中学校の剣道部には課題がある。それは生徒数や剣道部の設置数の減少と専門性を備えた教員の不足である。こうした状況に鑑みて、地域移行のモデル地域を設定し、検証を実施している。そこには共通課題が存在する。それは部活動の歴史に鑑みた地域、保護者、教員の意識改革である。次に指導者の確保

である。剣道ができるからといって指導ができることには繋がらない。生徒・保護者のニーズに合った指導者が必要になってくる。また、平日は教員、休日は外部指導者と分けると、指導やチームの一貫性が問題となる。さらに兼職兼業教員の勤務管理、環境整備、中体連の運営転換などの課題が残されている。

そこで、全剣連では、学校と地域の「融合型」の部活動が望ましいと

考え、そのための改革として①「部活動指導員制度」の導入による学校教育現場への指導者の参入、②「社会体育指導員・授業協力者」の地域部活動への参入、③地域における若手指導者の育成——を推進する。全剣連はさまざまな教育機関と連携し、中学校部活動の段階的な地域移行へ繋げたいと考えている。その第1段階として今年4月には中央講習会で各都道府県連盟への協力依頼や各都道府県指導者名簿の作成を行っている。

▽高橋健司氏

近年の柔道の現状は、経験がある小学生が中学生になると柔道をやめてしまい、中学生の競技人口増に繋がっていない。また、公立学校では柔道を専門とする体育教員が不足しているだけではなく、管理職が安全面や専門性に鑑みて創部を認めない現状が起きている。さらに、教員が部活動の指導にかなりの時間を割いているなどの問題点を抱えている。以上の点を踏まえた上で部活動を地域に移行する際には、次の課題が挙げられる。

・大会に参加する上で地域スポーツ



シンポジウムで意見交換を行うパネラー

団体の定義が示されていない。
・選手のチーム割りの再編成。

・平日に学校、土日に外部での部活動となると生徒に休息を取らせなくて良いのか。

・部活動の指導に当たっている教員のやりがいが減ってしまうのではないか（教員が事務処理などを担当しなければならず、負担が減るということはない）。

かつて教員はサービスマン業であるといわれた時代もあった。部活動の今後のあり方も検討しつつ、指導者への配慮や気遣いを考えてほしい。

発表後の意見交換では基調講演を

行った小久保氏も加わり、最後に壇者からの感想が述べられた。

▽三村由紀氏

シンポジウムの内容を聞き、まずは部活動に従事している先生方に敬意を表したい。また、武道の地域移行については、地域に道場があるので、そこが受け皿になってくれると他のスポーツ種目よりも上手く移行できるかもしれない。さらに、地域に活動の場があることはいつでも戻ると考えられる。

■総会・表彰式

4日午後1時から総会と表彰式が行われた。総会に先立つ令和4年度日本武道学会優秀論文賞の表彰では、人文・社会科学系から堀川峻氏（筑波大学）の「近代初頭の武士道思想に関する一考察―『武士道の淵源』と『武士道と倫理・道徳』に着目して」、自然科学系から志々目由理江氏（宮崎大学）の「柔道選手における運動間に行う短時間の前腕屈筋群へのアイシングが把持筋持久力に及ぼす影響」、武道指導法系から三宅恵介氏（中京大学）の「柔道競技におけるスコア獲得に有効な投技の戦術行動」の3点が選ばれ、大保木輝雄日本武道学会会長から表彰状を受けた。

続いて大保木会長が「武道学会が対面方式で3年ぶりに開催されました。規制によって当たり前のことができなくなつて、対面の意義を理解する2年間となりました。武道は対面の極地を行くものだと思えます。武道学会が世界に何を発信できるかと考えた際、物事の意義と価値、その弊害も含めてきちんと伝える必要

があります。そのためにもさまざまな観点から研究を重ね、その中身が何であるかを外国の人でもわかるように自分の言葉で語ることが必要なのではないかと思えます」と挨拶した。

その後行われた総会では「少林寺拳法専門分科会の設置について」を含む9件の審議事項が承認された。

■研究発表

両日の午前に行われた研究発表は、4分野で計67演題に上った。その一部を紹介する。

▼人文・社会科学系

・中山佳子氏（早稲田大学スポーツ科学研究科）ほか
「現代における柔道の価値に関する一考察」

現在の柔道の価値とイメージについて柔道経験の有無による差異を明らかにするため、アンケート調査を実施した。質問内容は柔道そのものに関する8項目と柔道家のイメージに関する6項目で構成され、回答者は「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の四つから回答した。

結果は、柔道経験の有無にかかわらず「あてはまる」「とてもあてはまる」と回答した項目は、「体力や健康の保持・増進」「礼儀」などの4項目。柔道経験者が非経験者を大幅に上回ったのは「知的」「協調性」「危険」など6項目。反対に「勇気」「近寄りたさ」は非経験者の方が大幅に「あてはまる」と回答した。

結論として、柔道には身体能力の向上や他者を敬う姿勢の習得の面で非経験者にも期待されていると言える。また、非経験者の柔道に対する「危険」とのイメージは五輪の影響や武道必修化によって低下したことがうかがえる。また、コミュニケーションや知性に関わる部分は非経験者のイメージの低さがうかがえる。

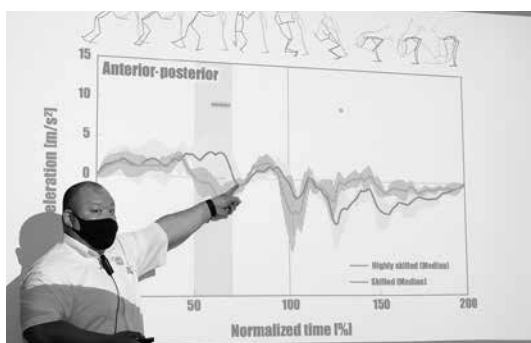
▼自然科学系

・石井孝法氏（了徳寺大学）ほか
「柔道背負投に関するバイオメカニクス的研究」

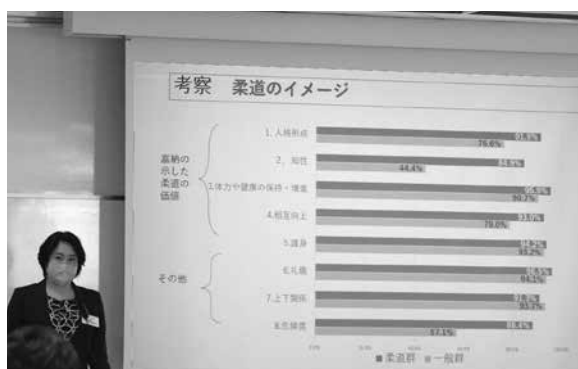
背負投の身体の重心速度に影響する要因を解明するため、一流選手のグループと学生選手のグループを比較した。背負投を練習させて、身体分析点のデータを収集。分析区間は「取り」が軸足を離地させた時点か



大保木会長（左端）と優秀論文賞で表彰された（左から）三宅氏、堀川氏、志々目氏



自然科学系：一流選手と一般選手の背負投の身体加速度の違いについて研究データを発表する石井氏



人文・社会科学系：中山氏による調査結果の発表



ポスター発表：介入指導による結果を説明した大嶋氏



武道指導法系：脳機能障害がある男性（手前右）と内容説明を行う三苦氏（右奥）

「受け」の身体の一部がマットに接地した時点までとした。一流選手グループは軸足が接地した後も身体加速度が変わらないのに対して、学生選手グループはブレキがかかっていた。これらの結果から一流選手は軸足をそのまま前方向に接地しブレキがかからないようにしているのに対して、学生選手は軸足を横に向けて接地していることが示唆された。背負投では、軸足の接地後にブレキをかけていないかを観察することで技能の改善を図ることが可能になると考える。

▼武道指導法系

・三苦保久氏（滋賀県立大津清陵高等学校）ほか

「高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性」

高次脳機能障害がある65歳男性（剣道歴4年）への指導実践を報告した。男性は出勤中にバイクの事故で高次脳機能障害の後遺症が残り、深刻な鬱状態に陥った。その3年後に剣道クラブに参加した。剣道は1対1の対面が多いため、稽古では相手と向き合い、気を合わせて行うことを意識させた。これによる効果

で、相手の立場に立つという社会性を習得できた。さらにできることが多くなると自信に繋がり、他者を見る余裕が生まれた。

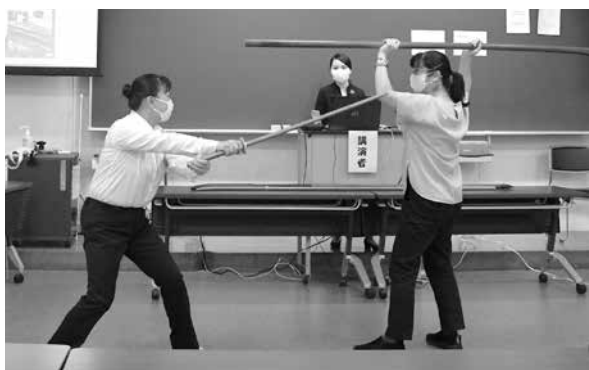
▼ポスター発表

・大嶋悠正氏（筑波大学院）ほか

「柔道競技における個別コーチング実践事例研究」

柔道における競技能力の指標として重要視される「組手」に着目し、事例研究を行った。研究は「相四つで奥襟を持たれる」ことを苦手とする柔道部員に対し、①構え、②手の位置、③引き手の切り方に関する介入指導を実施。その結果、乱取り稽古で対象者の投げられる回数が減ったこと、また、それに伴い相手の組手のパターンも変化したことが述べられた。まとめとして相手のパターンは変化するため、常に新たな事例として研究する必要があると述べた。





なぎなた分科会では史料に基づき薙刀操法の実演が行われた



剣道分科会では酒井氏が海外での事例をもとに、新たな方法論で武道の教育力を論証したことなどを説明した

■専門分科会

4日午後に関われた専門分科会の主な内容は次の通り。

▼剣道

酒井利信氏（筑波大学体育系教授）が、「武道学における精神文化史研究 序説―研究方法論の探求―」と題して講演を行った。

武道の精神文化史、特に刀剣の思想を中心テーマに研究を続けてきた同氏の研究活動を振り返り、倫理学・東洋思想の泰斗・高橋進氏から大学院生時代に受けた「研究方法論は、自分で一生かけて作り上げていくもの」という教えと、直伝の「行間を読む文献学」の方法論で、以来27年間にわたって続けた試行錯誤の歩みがあったと語った。

その後、海外での剣道指導・講演活動の中でユーゴスラビア紛争時の元兵士と出会い、彼が戦争で受けた精神的障害を武道の稽古で癒やそうとしている話から東欧における武道教育の可能性を感じ、その元兵士を研究対象に、質的データ分析法を援用しつつ、新たに構築した「文献学＋質的研究」の方法による論証の結

果、日本武道の教育力は海外で通用することが明らかになったことを解説。この事例を基に、今後の計画として国際的「生涯武道論」の再構築と生涯武道インストラクター養成プログラムの開発という研究活動の一端を披露しながら、さらに研究方法論の探求を続けていくと締めくくった。

▼弓道

「パラアーチェリーに学ぶ弓道の新たな可能性を探る」という演題で、大橋俊氏（パラアーチェリー・シヨルダーアーチャー）がパラアーチェリー競技について実情を述べた。パラアーチェリーの魅力は健常者と一緒に競技できること。ルールには何の区別もないため、健常者と同様に扱われ、競技や審判など運営に携わることを醍醐味にしているパラ選手はたくさんいると説明。障害があるからできないのではなく、できることを行うことが大切と強調した。

▼空手道

浅井一人氏（都立白鷗高等学校附属中学校）が特別支援学級での効果的な空手道授業の実践を紹介した。次に岡崎紀創氏（全日本空手道連

盟）は、特別支援学校に空手道授業を推進する狙いを取り組みを報告した。それによると、令和3年度から特別支援学校の学習指導要領が改訂され、保健体育の授業に空手道が明記された。令和2年度時点で967校ある特別支援学校のうち、約6割が新たに武道授業を始める可能性があった。全空連は今年2月、特別支援学校向けのテキスト「空手道をやってみよう」を作製し、全国の1千校に無償配布した。同3月に清水希容選手によるリズムカラテ「パプリカラテ」の動画を公開。令和元年には1校だった空手道の授業実施校が今年は39校に増加した。

続く井下佳織氏（麗澤大学）による報告では、全国の特別支援学級の58%で空手道授業を実施していると説明された。

▼なぎなた

渡邊佑里乃氏（公益財団法人日本美術協会上野の森美術館美術業務部）が「史料から読み解くなぎなたの特性」という題で講演。初めに薙刀の歴史を振り返り、史料を元に薙刀を扱ったとされる3名の人物に焦点を当てて薙刀の技やその特性につ

好評発売中!

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、共同執筆で紐解く。空手の真髄に迫る白眉の二冊。

空手道

その歴史と技法

小山 正辰 和田 光二 嘉手苅 徹 著



四六判・上製・568頁・定価2,640円

◎ ご注文・お問い合わせ ◎

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



障害者武道分科会での中村氏の発表

いて発表した。司会の木村有里氏(横浜保育福祉専門学校)を中心に実際に薙刀を使って史料に書かれている薙刀の操法を実演した。

渡邊氏は研究のまとめとして、「薙刀」から「なぎなた」に移行した結果として、①時代の変化に伴い攻撃部位も変化した、②史料にある太刀対薙刀の描写が現在の剣道対なぎなたの異種試合に繋がっている、と述べた。最後に渡邊氏は「なぎなたは薙刀によって育まれ、受け継がれ、その特性・強みを再認識することができました。今後もその部分が受け継がれていくことを願っています」と締めくくった。

▼障害者武道

濱名智男氏(日本文化大学)が作成を担当したID(知的障がい者柔道ハンドブック(全日本柔道連盟発行))について発表した。まず、ID柔道で懸念されるのは傷害事故の可能性であり、指導者は安全な柔道の仕方を教える必要があると語った。

また、安全な柔道を実施するには練習者が互いに協調し合う技の練習が大切であること、そこから精神機能の向上が期待できることを説明。そのためには指導者が相手との協力を促すことや技を習得する際の言葉かけや励ましが必要になると述べた。最後に、互いに協調することで練習者から指導者に、さらに周囲にその「和」を伝えることに繋がり、ID柔道のさらなる発展を目指す可能性を示唆した。

続いて中村和裕氏(福山大学)が精神・知的障害者に対する柔道療法の効果について研究発表を行った。中村氏は島根県内の病院が精神患者に行っている柔道を取り入れた療法を紹介。柔道療法の精神・知的障害者に達成感や自信といったポジティブな影響を与えること、障害という困難を乗り越え、より良く生きていくための治療になりうると説明した。

▼柔道

今回は実施せず。

自然科学系

演 題	発表者	所 属
武道種目に携わるスポーツ少年団指導者における救急対応に関する実態	佐野 颯斗	国際武道大学
弓道において矢の着点のばらつきを左右する発射時の要因について	原田 隆次	国際武道大学
異なる素振り動作における上肢の筋発揮タイミングの特徴	椿 武	神戸親和女子大学
剣道難聴予防のための高機能サポーターの提案	濱西 伸治	東北学院大学工学部 機械知能工学科
大学男子剣道選手における面打突動作と各種跳躍能力について	佐々木陽一朗	筑波大学
柔道療育が精神・知的障害者の行動体力に与える影響	中村 和裕	福山大学
柔道背負投に関するバイオメカニクスの研究： 身体重心速度に影響を与える技術的要因	石井 孝法	了徳寺大学
押し力を受け止める技術―体勢の違いの比較―	射手矢 岬	早稲田大学
大学柔道競技者の稽古が高めるオキシトシン分泌： 精力善用と自他共栄の両立は可能か？	松井 崇	筑波大学体育系

武道指導法系

演 題	発表者	所 属
剣道授業における「かた」学習が新学習指導要領の3つの柱の育成に及ぼす学習効果に関する研究	菊本 智之	常葉大学
「アダプテーションマッチ」を取り入れた中学校の剣道授業に関する定性的研究	山田 弥香	福岡教育大学大学院
剣道における指導行動と動機づけの関係	白須 鉄也	東海大学大学院 体育学研究科
中等教育の合気道指導： 巣鴨学園における「奪取技」を用いた乱取の取り組み	羽場 逸夫	巣鴨学園
高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～ その4	三苫 保久	滋賀県立大津清陵 高等学校
柔道三角絞における足の技術の効果：足首屈曲および伸展	石井 直人	秋田工業高等 専門学校
柔道競技における大外刈のキネマティクス技術分析 ～受の崩れに着目して～	清水 祐希	早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科
柔道指導者における促発身体知に関する意識調査	中川原知波	東京学芸大学大学院
柔道療育の効果と課題に関する質的研究 ―指導者を対象としたインタビュー調査から―	小崎 亮輔	鹿屋体育大学
トップ選手になるための必要な条件： 2004年アテネ五輪金メダリストM氏へのインタビュー調査から	仲田 直樹	日本経済大学
柔道のかげひき動作測定尺度の構成	有山 篤利	追手門学院大学
剣道の試合における暫定的な審判法による試合内容及び戦術行動の検討	時村 実壮	順天堂大学大学院 スポーツ健康科学 研究科
東京五輪空手組手競技における得点技に関する研究： メダリストと非メダリストの比較	大徳 紘也	日本体育大学大学院
弓道の弓弦の違いに着目した指導法への活用について	松尾 牧則	筑波大学

一般研究発表 演題・発表者抄録掲載一覧①

人文・社会科学系

演 題	発表者	所 属
柔道整復師国家試験出題基準に含まれる嘉納思想を整理する	稲川 郁子	日本体育大学
大東亜戦争後（1945 年～ 1970 年）における柔道の展開事情に関する研究 ー柔道界と柔道整復の関係性に着目してー	丸澤 遼子	日本体育大学大学院 保健医療学研究科
ドイツの事例から見たライブステージに合わせた柔道教育の在り方を考える：ドイツ柔道連盟の昇級審査規定の改正（2022 年）に見られるアプローチを中心に	ソリドーワル・ マーヤ	津田塾大学
武道必修化による剣道授業における学習成果の変化	阿部 剣征	別府大学
剣道試合・審判規則第 1 条の「公明正大」について	加藤 純一	皇學館大學
明治から昭和戦前期に設立された弓道の統括団体に関する研究： 定款の分析を中心として	五賀 友継	国際武道大学
武道歌の計量テキスト分析による居合術の理念と術理の抽出	小林 勝法	文教大学
ドメイン別 GRIT に関する研究 ー学生アスリートとその競技成績に着目してー	岩尾 敬太	京葉ガス株式会社
大学女子柔道選手が柔道に向かう動機付けに関する調査研究	川戸 湧也	仙台大学
各国の少年柔道における傷害調査	曾我部晋哉	甲南大学
近代期の武士道論者にみられる武道観に関する一考察	堀川 峻	筑波大学
剣道における比喩表現に関する一考察 ー明治・大正期の剣道書を中心にー	中野 香月	天理大学大学院 体育学研究科
近代初期女子教育における武道論の考察：星野天知に着目して	大石 純子	筑波大学
近世の軍学者・花房義制をめぐる武術の人脈	足立 賢二	宝塚医療大学 保健医療学部
近代の武術・武道における小太刀に関する研究	中山 竜一	明治大学大学院 国際日本学研究科
剣術伝書にみられる比喩表現に関する一考察 ー直心影流を中心にー	軽米 克尊	天理大学体育学部
土佐藩 片岡健吉の稽古記録について	森本 邦生	貫汪館
彦根藩における念流正法兵法未来記について	数馬 広二	工学院大学
琉球の武術に影響を与えた薩摩藩の武術（津堅之棍）	早坂 義文	古武道研究会
柔道における「競争」概念の批判的検討	佐藤 雄哉	国士舘大学
現代における柔道の価値に関する一考察 ー柔道の印象に関する意識調査よりー	中山 佳子	早稲田大学 スポーツ科学研究科
武道における芸術性の活用と実践「武楽」2 ー武楽『神曲 修羅六道』実践報告：いかに「武の美」を舞台芸術作品として表現したか	源 光士郎	武楽座
朝鮮民主主義人民共和国における空手道の展開過程に関する考察	宋 修日	朝鮮大学校
中国武術研究の基盤構築： 史資料の整理およびその日本武道との関連	劉 暢	早稲田大学 スポーツ科学学術院
中国の武当山武術に見られる武術の観光化政策について	張 卿	日本体育大学大学院

一般研究発表 演題・発表者抄録掲載一覧②

ポスター発表

演 題	発表者	所 属
剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係（その 3）	笹木 春光	東海大学
剣道具製作における SDGs の取り組みと地域社会におけるその必要性	山村 星子	株式会社七星
欧州における柔道環境調査	戸田 将太	兵庫教育大学
柔道選手における肩の位置覚についての基礎的研究	竹澤 稔裕	順天堂大学
柔道競技の小外刈における運動切替の熟練差	高野 綺海	東京学芸大学大学院
全日本サンボ選手権大会における競技分析的研究 ーサンボ競技の技術体系の観点からー	馬場 元気	至学館大学大学院
男子柔道選手の競技中における生理学的応答	藺田 瑞穂	大東文化大学大学院 スポーツ・健康科学研究科
柔道競技中における柔道場内の二酸化炭素濃度に関する研究	西 奈緒	皇學館大学
血流制限下における 4 方向ジャンプトレーニング効果の検討 ー大学女子柔道選手を対象としてー	大川 康隆	東海大学
剣道の面マスク着用が練習中の心拍数へ与える影響	高橋健太郎	関東学院大学理工学部
旧制第一高等学校の資料分析からみた学生の剣道観と剣道実践	佐藤 皓也	順天堂大学 スポーツ健康科学部
中津藩中西家古文書における一刀流伝書について（第 2 報）	立木 幸敏	国際武道大学
平常心の意味と構造的特徴	江川 致成	東京学芸大学
剣道形を取り入れた中学校剣道授業実践について ーオンライン授業研究会の実施に向けてー	太田 順康	大阪教育大学
剣道体験に参加した小学生の剣道に対するイメージの変化	京林由季子	岡山県立大学
ICT を活用した空手道授業の指導成果と課題	井下 佳織	麗澤大学
柔道競技における個別コーチング実践	大嶋 悠正	筑波大学大学院 人間総合科学研究群 博士課程
小学校中学年を対象とした柔道遊びの教材開発	與儀 幸朝	鹿児島大学
柔道授業が身体に及ぼす影響 ー養成学校生に対する認識調査を基にしてー	福井悠紀子	東亜大学



剣道 その歴史と技法

埼玉大学名誉教授 **大保木輝雄** 著

四六判・上製・516頁・定価 2,640円

剣道の技法は個人の力量だけを問題にするのではなく、相手と自分の「間」を軸とした剣術(剣の理法への気づき)へと展開した。本書は戦国末期から江戸時代初期を起点に、今日に至るまでの剣道の歴史的発展の経緯を示した。戦国期以前の剣術の在り様を認識したうえで改めて各時代の流れに沿った剣道史を考えてみたいという筆者の思いを実現すべく、連載終了後5年のときを経てついに単行本化。



剣道の文化誌

— 剣術・撃剣・剣道、その文化としての成り立ち —

明治大学教授 **長尾 進** 著

四六判・上製・480頁・定価 2,640円

戦後、剣道は競技として飛躍的に発展してきた。試合での勝利を目指して努力する姿は尊いものであり、そうした面が剣道の普及・発展に貢献してきたことは確かである。一方、剣道を「文化」として捉えた場合、形(日本剣道形など)や日々の稽古の中にその価値を見出すことができる。

本書では剣道の持つ文化としての多様な面を、時代を追いつつながら、わかりやすく紹介する。剣道を愛好する方には、剣道を改めて見直すきっかけとして、剣道をあまりご存じない方には、剣道という日本文化の成り立ちを知るガイドとしてぜひ一読を。



伝えたい日本のこころ

絵と文 (なかむら まみ)



中江藤樹 母への薬

良寛さまと笛

小林虎三郎 米百俵

F4判・カラー・上製・98頁・定価 2,970円

古き良き日本人の美德・品格が伝わる一冊。「小林虎三郎 米百俵」「中江藤樹 母への薬」「良寛さまと笛」など、かつて語り継がれていた日本人の心を描く物語を「天地人」「河井継之助 龍が哭く」の挿絵家・中村麻美の絵で鮮やかに彩る。解説文含む全四十五話収録。



編集・発行 公益財団法人 **日本武道館**
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
ホームページ <https://www.nipponbudokan.or.jp>

お問い合わせ・ご注文は
日本武道館出版広報課
までどうぞ!

TEL03(3216)5147
FAX03(3216)5158

